

少年叢書第十編

佐木信綱著

少年歌話

1702

博文館藏版







山田書房
東京・神田

佐々木信綱著

少年歌話

博文館藏版

Handwritten signature in cursive script, oriented vertically on the left page.

藻 かり 舟

目次

雀の歌……以下廿三篇少年世界の爲に……	一	緑兒……	八	わが皇國……	一九
わぢい様……	一	雪のあした……	八	春の歌……	二〇
漁夫の子供……	二	坊はつよい……	九	春の恵……	二〇
小鳥の歌……	二	苦痛……	九	野あそび……	二一
海國の少年……	二	八重山吹……	〇	歸省……	二二
歳の暮……	二	我子……	〇	秋……	二二
樂しき家……	三	天つ少女……	〇	朝の歌……	二二
二人の希望……	三	のゝ様いくつ……	一	小舟……	二三
まゝいこ遊び……	四	小楠公戦死の圖に題す……	一	遊獵……	二三
勞力……	五	進軍の歌……以下七篇軍歌……	一	豫備兵……以下七篇廿七八年作……	二三
紅葉と松……	五	坂本少佐……	二	かゞり火……	二九
梅さく園……	五	敵の孤兒……	三	故郷の春……	三一
玉のさぼそ……	七	守永偵察隊……	三	幼き大將……	三三
春のゆふへ……	七	雪夜の斥候……	四	村の教師……	三六
		輜重兵……	五	若きれや子……	三七
		凱旋門……	七	遼東の山……	四七
		千代田の宮……以下十篇唱歌……	八	小川の流……以下四十五篇新にふれて……	四八
			九		

附 録

藻 かり 舟

雀 の 歌

『すうすめすいめ今日も又
くうらい道をたひひとり
林のおくの竹やぶの
さびしいお家へ歸るのか』

『いゝえ坊ちやま、彼處には
父さま母様待つてゐて
たのしいお家がありまする
そんから坊ちやま
チウ——』

お 祖 父 様

『僕は大好お祖父様
以前は強い軍人で
左の肩にあるきずは
熊本城の戦手に
敵のねらうた弾丸の跡
土曜の夜がくるごとに
白いお髯をなでながら
ウチートルローのたゝかひや
鶺鴒 越のおはちしを
僕に話してくださるの
僕は大好おちい様』

月光	四八	旅商人	六〇	虫の聲	七三
愛の糸	四八	童あり	六五	月八首	七三
まことの道	四八	愚なる幼子	六五	軍營	七四
人のつこめ	四九	笹まくら	六六	ひろげし書	七四
冬の夜ちまたをあるきて	四九	旅中の作	六六	冬の日	七五
今のさびひ	五〇	越前に物しける時	六六	朝の風	七五
埋火	五〇	送別の歌	六七	田家の暮景	七五
黄金と眞珠	五一	籠の虫	六七	長良川	七五
ある夜	五一	さ夜風	六八	鮎子に物しける時	八七
蟬に	五二	田家の秋	六九	箱根に物しける時	八七
薩摩守	五三	樵夫の家	六九		
九郎判官	五五	古戦場	七〇		
鶴が岡	五六	洪水	七〇		
老將軍	五七	春風春水	七二		
納豆賣	五八	燕	七二		
老僧	五八	花すみれ	七二		
織子のおもひ	五九	春の風	七二		

目 次 終



漁夫の子供

『都の人はをかしいな

あんな帽子に目をよけて
うさの袋を身につけて

そして濱邊で水あそび』

はやしつれつゝ手をうつて

岩にくだくる荒波の

あわたつ中におどり入る

漁夫のことも二三三人

小鳥の歌

軒の小鳥は問ひたりき

『汝はそこにやしなはれ

常によき餌をあぢはひて

いかに楽しと思ふらむ』

籠の小鳥はこたへけり

『いな〜いかでよかるべき

玉のどぼその中よりも

谷のふる巢ぞなつかしき』

海國の少年

山よりたかきあら波も

巖くだかん嵐をも

いかで恐れん海にある

我らが友よわが友よ』

たかき功をたてつべき

我らの舞臺は波の上

つきぬ譽をのこすべき

われらの墓は波の底』

年の暮

子羽ねつかむお手玉どらむお正月

愛のみちたる窓のうち

さやけき月もさし入れり

二人の希望

よせ来る浪のおどさむく

日もまだいでぬ磯際に

砂をほりつゝ鹽水を

たへへてあそぶ童あり

かなたの友をよびとめて

『次郎さん君は何になる』

逃げゆく蟹をとらへむと

追ひゆく童のふりかへり

『僕は日本の水兵さ』

あのいさましい軍艦の

甲板のうへが僕の家

ねもしろいなあ水兵は

君は何にぞ五郎さん』

はやくこよかし坊のおうちへ

母いとし子の晴着の衣も縫ひをへつ

いざやうれしき年を迎へん

父おのが身による年波は忘られて

子らと共に春をまつかな

楽しき家

夕けのはしをうちおきて

いもどは手をばふりながら

ふしもをかしき手まり歌

うたへる聲のをかしきに

姉のいだける末の子の

まだものいはぬをのこ子は

われもかわゆき手をふりて

かわゆき聲にうちわらふ

父もたのしくうちあめば

母もたのしくうちあめみつ

『僕か』といひて腕をくみ
 『僕は汽船を買ひあつめ
 その船長に僕がなる
 あそここの岸にかゝつて
 あんな小さな船でない
 大きな船に乗り
 綺麗な貝やよい若布
 澤山つんでどしどしと
 世界の果へ賣りにゆく』
 浪をいろどるあさ日かけ
 いそ山松にかゝりやけば
 小さな胸にさきにはふ
 希望の花をさかせんと
 眞砂のうへにおきたりし
 カバン取あげ肩にかけ
 未来の船長水兵は
 手を引つれていそぎゆく

まゝと遊び
 家のうしろの葡萄園
 色こきふさの打たれて
 夕日おほへる下かげに
 敷けるむしろの新らしく
 まゝとすとて遊ぶにも
 睦まじげなる姉妹
 肥たる頬はくれなゐに
 似たる目元も愛らしや
 姉は小さな庖丁に
 青き木葉をさざみつゝ
 夕食の用意せわしげに
 妹は抱きし人形に
 昨夜さゝたりし物語
 片ことながら語らへり
 玄げる葡萄の葉かげより

星の光の見えそめて
 すいしく渡る夕風に
 二人の愛もこぼるなり
 勞力
 味はひ甘きくだものは
 木高き枝にみのるなり
 光かゝやく白玉は
 かたき巖のうちにあり
 思ひ見よかし世の中に
 おのが力を費さで
 額を汗にぬらさず
 得べき寶はあらざるを
 紅葉と松
 千しほにそめしもみぢ葉は
 さらべる松にいひたりき

『わがうつくしきこの衣を
 このよそほひを見よや君
 君はいかにかいつまでも
 れなじ衣をばまとひたる』
 松はいさゝか打ゑみて
 答へざりけり何事も
 その夜のほごに木枯は
 こゝの園生をおどづれぬ
 もみぢの衣はやれはて
 松のみひとり色ふかし
 梅さく園
 『朝日のどかにかすむなり
 來れいもうともしもに
 シヨソ伴なひて行て見む
 そともの岡の梅ばやし』

兄はこずゑをゆびさして

『こゝろして見よ此花を

あらし木がらし深き雪

玄のぎてかくは咲きいでぬ』

うちはゝゑみていもうとは

『さらば兄君われもまた

學びの道をしそしみて

高きかをりをわらはさん』

梅さく園のあさばらけ

たのしき春のうたうたふ

小鳥のこゑをきゝながら

小犬ともなふ兄妹

『朝とくおきて明日もこん

いざやいもうと學校に

行くべきときは近づきぬ

さらば歸らむシヨンもこよ』

くぬ木おひたる里はやし

左にをれて朝霜の

日かげにけふる畔道を

うちつれだちてたゞ二人

兄は足とくすゝみつゝ

小川のきしの草かげに

えものあさると行くシヨンを

口笛ふきてよびよせて

妹も兄におくれじと

肩にたれたるくろ髪も

青きリボンもそよ〜と

吹く春風になびかせて

玉のとほそ

はまれの花の咲きみちて

光かゝやく宮殿は

玉の戸ばそを開きつゝ

入りくる人をまてるなり

ひらきてあれど其門に

至るはさのみ多からず

あるは道にてつかれつゝ

あるは道にて迷ひつゝ

春のゆふべ

籠にそでにあまるまで

すみれさ藤とり〜に

野をなつかしみ兄弟の

まなびや

行きかへりつゝ遊ぶまに

長しとおもひし春の日も

夕ぐれがたになりぬらむ

入日のかげはおちはてゝ

西のやまの端いろあかし

遠のひと村はる〜と

霞のうちにかくろひて

まきの童やかへるらむ

ふく草笛のこゑきよし

一筋たてるうすけぶり

賤が夕けやたくならむ

雁がねとほき川くまの

柳のいとやけふるらむ

み空にたかくあがりつゝ

歌ひし雲雀もおのが子に

夜の歌をばをしへんと
芝生の床にかへりけり
父のみことの書をしも
をしへ給はる時はきぬ
野べの別はをしけれど
さらばかへらむやよ弟

このさ蕨の母ぎみに
この花たばは妹にと
手をひきつれてむつまじく
今日のたのしさかたりつゝ
まづかにかへる兄弟を
かけおぼるなる夕月は
かすみの袂もれいでて
送り顔にもてらすなり

緑 兒

生ひそめし松のみどり兒
すこやかに高やかに
生ひたてよ松の緑兒

降りつもる雪にたへつゝ
大空にたゞよふ雲を
まのぐばかりに

雪のあした

森も林も野も山も
みな白砂にうづもれて
庭もまがきも草も木も
同じ色なるうつくしさ

ボチよ此方こよ此方來れ
汝も雪のうれしきか
尾を打ふりてころくど

打まるがりて遊ぶなり

門のひつぢ田見わたせば
案山子の袖もまろたへに
そどもの岡をみわたせば
とび行くからすもま白なり

氷のとぢし裏の川
行きてや見ましボチつれて
とちりの友をよびつどへ
つくりやせまし雪の山

坊はつよい

小さき國旗ふりながら
小さき履をふみしめて
芝生あるきし幼子は
木の根にふれて倒れけり

父は窓より聲かけて

『坊は強いぞ泣くな〜』
泣きたき顔をまかめつゝ、

『坊やはつよい日本人』

苦 痛

曇れる雲のうしろにも
あきらけき日の光あり
はげしきあらし強き雨
やみし後にはよき日あり

ふる雪霜をまのぎてぞ
若木の梅は香にはほふ
厚き氷をまのびてぞ
そこなる魚は春にあふ

ながあめはれて空青く

木がらしやみて春いたる
長くついかずくるしびは
うしろにまてり樂しびは

なげきの森をすぎゆかば
さちの花さく野にいでん
苦痛は人をくるしめず
人をすゝむるきざはしぞ

八重山吹

狩くらしつゝ歸るさの
野道は雨と成にけり
いそげ我駒藁ふきの
家こそ見ゆれかの岡に
あるじの女言問はん
簀はあらずや菅笠は

答はなくてさしいだす
八重山ぶきの花一枝

我子

廣きみ空をわがものに
歌ふ雲雀も夕されば
芝生の床にかへりけり
まてる吾子やおもふらむ

天つ少女

天つ少女がいそしみて
をり／＼ごとじに縫ふ衣は
春はさくらのくゝり染
秋は千種の綾錦
夏は若葉のらすみどり
冬は紅葉の朽葉色
天つ少女のぬふ衣は

たゆるまもなし四の時

月様いくつ

かどべにたちて夜なくに
月様いくつと歌ふ子を
月の御神は見れろして
やさしき光に照します

ぬまちふしまちよひ／＼に
み姿見えすなるまゝに
童は母に問ひたりき
病氣がわるいの月様は

小楠公戦死の圖に題す

南風日々におどろへて
芳野の宮居霜寒し
歸らじと豫て思へる我命

けふこそいらめなき數よ

四條繩手の夕あらし

若木の楠を吹き折りぬ
君が爲君が盡し、眞心は
千年の後にどいまりて

進軍の歌

日本をのこのふるひたち
進むに敵のあるべしや
怒れる鷲も挫ぐべし
あらふる獅子も倒すべし

日本をのこのきをひたち
進まば何かならざらむ
千引の岩もくだくべし
千尋の海もうづむべし

日本男兒のうちつれて

進むを誰かふせぐべき

奮へ日本のますらをよ

進め日本のますらをよ

坂本少佐

烟か浪かはた雲か

はるかになびくうす煙

海原とほく見わたせば

うれしやまさに敵の艦

あふるゝ勇氣おさへつゝ

まちにまちつる敵のふね

碎さてうちて黄海の

藻屑となさん時のまに

どいろく砲の音すどく

さかまく浪の音あらく

海洋島の沖つべに

はげしき戦起りたり

艦の中にも赤城艦

ふねは小さくかよわきも

鐵よりかたきこゝろもて

士卒は艦を進むなり

よわきをねらふ敵艦は

左にみぎによせくるを

つゝきて放つ我砲に

敵の甲板人もなし

くだけやうてや敵の艦

残るふねなくならんまで

胸をば楯に身を的に

すゝめやうての聲たかし

飛びこし敵の弾丸は

音すさまじくくだけたり

今までありし艦長の

姿は見えずなりにけり

くだけやうての號令は

士卒の耳にのこれども

今までたちし艦長の

すがたは見えずなりにけり

かよわき艦をすゝめつゝ

まされるふねと戦ひて

榮あるいくさに艦長は

はえある死をば遂げにけり

其身はよしやくちぬとも

譽はくちじ千代八千代

赤城の艦の名と共に

わかきこゝろぞうたはれむ

敵の孤兒

どいろく砲の音すどく

黒雲まよふ威海衛

木枯すさび雪うちちりて

かしこにこゝに弾丸ぞ飛ぶ

大尉は聲も高やかに

そめよ深雪をくれなるに

進めよ士卒皇國のため

正義の血汐をゝぎつゝ

いさみてすゝむ道のべに
泣く子の聲ぞきこゆなる
み雪をおほふ老松陰に
敵のみちし兒たゞひとり

母をや慕ふ父や呼ぶ
あはれいとしとたちどまり
抱きあぐれば打笑つゝも
大尉の腕にすがるあり

いかにかせましいかにせむ
敵營すではほど近し
伴なひゆかば羈絆とならむ
すてゝゆかんは玄のび得ず

よしゝ行かんともちひて
我はやまどのますらをぞ

左手に敵の孤子いだき
右手にふるはん日本刀

嵐はやみぬ雪はれぬ
敵はあどなくにげ去りぬ
朝日の御旗輝く野邊に
笑みてぞねむる幼兒は

守永偵察隊

ながるゝとどき大雪に
天をもぐらく地もくらし
敵の有様さぐらむと
つもれる雪をふみわけて
守永中尉がひきゐゆく
兵士の數は三十二

行けども行けどふる雪に

ゆくても更に見えわかず
あまりに雪の深ければ
道のかたへの賤が屋に
まばしといこふほどもなく
たちまちおこる物のおと

あやしの音と門のべに
たちいで見ればおもひきや
れしよせ來ぬる敵兵は
十重に二十重にかこみたり
味方はわづかに三十二
敵は六百有余人

いざやむかへてつき入らむ
日本たけをの赤き血を
異國の雪にそゝがむは
日本たけをの譽ぞと

はげます中尉の言の葉に
いよゝふるふわが兵士

すゝむいきほひはげしきに
敵はやうゝ退ぞきぬ
又もふりくる大雪は
中尉をはじめ七人が
國にさゝげしなさがらを
白き布もておほひけり

雪夜の斥候

天の川波あれたちて
かどなき瀧やれちくらむ
林も森も野も山も
みち白妙になりはてゝ
降りしくみ雪をやみなく
ふけゆく夜半の風つよし

身をさるごとさ夜風と

はげしき吹雪をかしつゝ

敵のありかをさぐるべく

命せられたる斥候の

たふとき職分つくさんと

すゝむ一人の兵士あり

をりく出すわが息は

氷りて髯の色玄ろく

衣はうすし風あらし

れゆびも耳も手も足も

されんばかりに寒けれど

いさめる胸はもゆるなり

もえたつかれの心には

寒さもあらずわびしさも

皇國と君をかもひつゝ

つとめつくすといそぐなり

いそぐ前途の森陰に

はげしき響起りたり

手にもつ銃を取りあげて

木立の奥をうかひひぬ

森には敵のあらずして

すさまじかりしかの音は

まげれる村竹をたをれて

まづるゝ雪の音なりき

打ゑみつゝもますらは

かしこにこゝに見めぐらし

又もゆくてをさぐらむと

道なき道をふみわけぬ

吹雪の風はふきをひて

東の空はなほくらし

輜重兵

けはしき谷もふみさぐみ

するどき川もうちわたり

敵地にふかくわけ入りて

我らは兵糧をはこぶなり

砲のどいろきどきの聲

腰のつるぎは音たてゝ

胸の血汐はをどれども

我等は車をすゝむなり

あらしはつよく雨すさび

前途はどほく日はくれぬ

宿らむかげもなき野べを

われ等は猶もすゝむなり

人はいこひてある頃も

我らは常につとむなり

人のふしどにある頃も

我等はかてを分つなり

朝けの飯を明けぬまに

彼處にこゝに配りつゝ

炊ぐらうつはを馬に乗せ

出たつ時も夜にくらし

東に西にゆきめぐり

道なき道をふみわけて

眠らぬ夜半はつゞけども

つかれやすむるひまもなし

われらのわざいくるしきも

塵よりかるき身一つを
み國と君にさゝげつゝ
重き輜重をになふなり

こがねもどくる夏の日に
あかづく顔をてらされて
手足もこほる雪の夜に
敗れし衣をさらすなり

死するにまさる苦しみも
人に知られぬはたらきも
我らはいかでかこつべき
我らはいかでいとふべき

大君のため國のため
われらはつとめ盡さんと
花やかならぬわがわざを

われらのいさみてつとむなり

凱旋門

萬歳うたふこゑは
山より海にひびくなり
光かやく日の旗は
町より里についくなり
大元帥の大御稜威
八洲の外にあふれつゝ
光榮ある勝利を土産にして
歸るや數萬の我兵士

おほふ杉の葉とこしへに
かざる撫子いろあかく
われ等國民わが兵士
共に皇國に身をさゝげ
今より後も事しあらば

わが皇國

あはれうるはしわが皇國
あつさ寒さもよそに似ず
海山川もけしきよく

花ははゝゑみ鳥は歌ふ
雪をいたゞく富士の山
色みどりなる琵琶の湖
吉野の山の春の花
清見が關の秋の月

あはれうるはしわが皇國
瑞穂の稻のうましね
千町の小田にうちなびき
千町の藏にみちみてる
あはれうるはしわが皇國
高さで鳴のたみくさも

死をもて國に報いつゝ
今より更にうるはしく
きづきたてなん凱旋門

千代田の宮

わが大君の萬歳を
一つ心にいはふなる
わが國民の聲ならむ
千代田の宮の松が枝に
ふく朝風のおときよし

ときはかきはに曇りなく
ひかりさしそふ日本の
國のすがたや玄めすらむ
高くそびゆる富士の嶺を
のぼる朝日のかげきよし

いたらぬくまなき大君の
めぐみの風になびくなり

春の歌

ひばりなき蝴蝶まひ
たのしゆかし春の日
青柳みどりにもえて
うぐひす聲のどかに
山邊も野邊もかすむなり

いざや友うちつれつゝ
菫の床にまどゐして
春の歌いさうたはん
いざ／＼我友いざ／＼歌はん

椿ちるたに間にも
若ゆとふ川瀬にも

春風ゆたかに吹きて
春雨音まづかに
たのしき時よ春はしも

をさまれる世に生れて
あさ日に匂ふ山ざくら
をりかざすこの樂しさ
あはれはれ樂しやあはれ樂しや

春の惠

のどけきはるの朝ぼらけ
うらわか草をなつかしみ
つながぬ駒もつちがれて
かすむみ牧のおもしろや

のどけき春の朝ぼらけ
林のおくのむぎはたに

朝けのけふりたなびきて
かすむ里わのおもしろや

のどけきはるの朝ぼらけ
海士のよび聲うら／＼と
ほしたる網のめもはるに
かすむ入江のおもしろや

のどけき春のあさぼらけ
磯ふりあらしいそやまの
松のみどりもいろ添ひて
かすむ小島のおもしろや

はるのひかりは野に山に
はた海かはにみちてけり
春のめぐみのあまねきを
あふがざるべき誰しかも

ひかりを仰ぐ野もやまも
めぐみをうくるうみ川も
うたへたのしき君が代を
いはへうれしき春の日を

野遊

空にはうたふ雲雀の歌
野邊にはほふ菫の花
緑なる草の薙をまどねにて
共に遊ばんいざや友

雲雀は床にねぶりけり
菫はつゆにねぶりけり
長閑なる夕の風に送られて
共に歸らむいざや友

歸省

なつかしき山見ゆ
 なつかしき野邊見ゆ
 夕日さす森陰小鳥むれて
 千町田はる〜と
 さ苗のいろあをし
 都のつとをたづさへて
 年ふるさとに今日つきぬ

あつかしの物皆
 笑ひつゝ迎へぬ
 妹は花束さゝげもちて
 弟は旗ふりて
 小犬も走り來ぬ
 我父母のまぢますか
 かやりのけぶりたちのぼる

秋

梢色づき稻葉みのりて
 樂し秋の日うれし秋の日
 月はさやかに虫いらたひて
 樂し秋の夜さよし秋の夜

朝の歌

ねぶれる小鳥のふしどをとひて
 音なき流の眠をさまして
 『起きよや起きよ起きよや起きよ』
 あしたの風は歌ひてすぎぬ
 去をれし小草に命をあたへ
 ひらかぬ窓の戸靜にのぞきて
 『起きよや起きよ起きよや起きよ』

うながしがほに朝日は照らす

小舟

こげや〜われらの舟を
 風ふく方へも進みてゆかん
 力をあはせかちどりゆかば
 嵐の風もいかでかどめむ
 こげや〜我等の舟を
 波たつ方へも進みてゆかん
 力をあはせかちどりゆかば
 五百重の波もいかでかどめん

遊獵

(小字は反響)

見よみよ谷のかけを
 それそれかしこにかしこに
 男鹿ぞ走る男鹿ぞ走る
 急げ友追行きて

豫備兵

其一

波まづかなる岩淵の
 渡頭に近きわら屋あり
 朝け夕けのうすけぶり
 かつ〜たて、からき世を
 心ほそくもおくりつゝ

「うちにいざうたん
 いそぎ進めいそぎすゝめ」

あゝあゝ残りをしや
 あゝあゝを鹿はを鹿は
 かげだに見えず影だに見えず
 一度はにがすとも
 山深く猶ゆかむ
 いざやゆかむいざやゆかむ

賤の父子は住みたりき

若き頃につよしとて

人にはこりし父なれど

老てふ敵のせめぎ來て

あがき病にうちふせり

父のいたづさいやさんと

千々に心をくだきつゝ

年まだわかき農夫は

日々に我業つとむなり

雲雀うたひて蝶まひて

浮間の小野のさくら草

花さく春のあしたにも

苗代小田にかりたちぬ

霧たちこめて雁なきて

あらか川をひのぬるて原

色づく秋のゆふべにも

刈田の面にいそしみぬ

八聲の鶏にさまされて

ちの薬をあたゝゆつ

ねよどの鐘はひいけども

藁うつ音はきこゆなり

父につかふる事のみを

あした夕べの務めにて

風あらし日も雨の日も

常に田畑をたがやしつ

名主の瀧は近けれど

納涼にゆきし夏もなく

飛鳥の山はほそなきも

雪見にいでし冬もなし

門の小川の水車

たゆむときなく朝宵に

うき世の中をめぐれども

猶苦しびは身をさらで

ふるき負債の残れると

薬の代價におはれつゝ

家にあませるものはたゞ

くり毛の駒と破れし衣

其二

いぶきの神の神風は

とざす狭霧を開きつゝ

くらき國原てらさんと

あさ日の光さしそめぬ

鶏の林の村雲は

唐土の野をねほひたり

神のたすくるみいくさは

あたの境にいであたり

み國をおもふ國民は

高き賤しきけぢめなく

進みいぬるもどまれるも

共にみ國につくすなり

このいそしめる農夫が

兵士の群にめされつゝ

兵役ををへて歸りしは

はやも三年に成にけり

身は賤のをのいやしきも

いくさの籍に身を置て

馬のりならし銃とれる

かれの思はもえたちぬ

身は數ならず貧しきも

君にさゝぐる赤心は

いかでか人に劣らむと

かれの心はわきたちぬ

もえたつ思おさへつゝ

わきたつ心のせめつゝ

召集の令狀の來りなば

父の看護はこの日ごろ

かれをあはれび助くなる

隣の老女にたのみてと

指折かぞへあさゆふに
めされなむ目を待たりき

其三

不幸の神はあはれある

かれの軒端をおどづれぬ
常に臥床をはなれぬぞ

さのみ危篤しと見えざりし
老たる父のいたづきは

日毎におもくなりけり
いとねもごろにとぶらへる

村の醫師は歸るさに
門におくれる彼をしも

ひそかに呼びていひたりき
永き年月たゆみなく

親に仕ふる孝心を
神もいととれぼさんに

あはれいはんもいとほしや

幸なき父の玉の緒は

つながん由もたえはて、

油つきぬるともし火の

風をまたでも消ぬべし

あはれいとしき限よど
いひてかへりし夕まぐれ

豫備の兵士を召すといふ
えらせの文は來りたり

文字さへわかぬ夕闇を
てらすか星の三つ二つ

くづれかゝれる荒壁に
なくこほろぎのこゑ細し

其四

母には早くわかれつゝ

たゞ一人なるわが父の
今のきはを打すて、

いかでか我はゆかるべき

まかはわれども國民の

務をなべてよそにせん

國と君とのみためには

さらばと心はげまして
枕のもどによりそへど

うすき衾につゝまれて
息たえゝに苦しめる

父のおもわを見る時の
立ち出ぬべき空もなし

時はやう／＼せまりきぬ
時おくれては甲斐あらじ

父に不孝の子となるも
君に不忠の民たるは

忍ひがたしとやう／＼に
くもるまなこをぬぐひつゝ

父の臥床にぬかづきて

許したまへや父上よ

今こそ長き別れなれ

み國の爲に身をすて、
父のなさけにむくいんと

涙はらひてたちいでつ
隣の老女になにくれど

わがぬぬ跡をたのみつゝ
ふるふ足をばふみしめて

わえぎつきぬるかひもなく
汽車のすではせいので、

煙のそらにたなびけり
心さだめてときのままに

かれはわが家に歸りきぬ
門をならむとせし時に

ひくきうめきはきこえてき
みだるゝ思ふりきりて

後の納屋にいたりつゝ

栗毛の駒を引き出でて

鞍おきつゝも語らひぬ

さけよ我駒我のしも

み國の爲にいそぐなり

いましの足ををれんまで

すゝみゆけかし吾駒と

いひさかせつゝと鞭とれば

ちれし主のここの葉を

聞きわけがほに乗る駒は

一こそ高きいなゝきを

なれにし門にのこしつゝ

ゆくやひづめの音高し

其五

駒の立髪吹きみだし

すさぶ夕風ものどせず

赤羽の町いつかのまに

稲附の里とくすぎつ

十條村のふみきりの

高きつゝみも見えそめぬ

西の田のもにかちかゝる

入日のかけを打ながめ

さだめの時は七時なり

はや間もあらじ吾駒と

まきりに鞭をつゝけつゝ

かれは線路にちかづきぬ

今か線路をよこぎりて

進みゆかんとせし時に

東の方ゆはせ来る

瀛車のひゞきとゞろけり

馬はたちまちおどろきて

止る手綱にとゞまらず

いとすさまじき音たてゝ

はせくる前に進みたり

すぎゆきたりし線路には

無惨のかばね散ばへり

其六

神のたすくるみ軍は

海にくぬがに打かちて

君のめぐみりから衣

せばき袂にうるほひつ

高麗もろこしの草も木も

みいつの風に打なびき

日の大御旗うらゝと

東の洋をてらすなり

かれどひとしく召されつる

同じ村落の兵士は

大御いくさに玄たがひて

旅順の港に金州に

いさをたてしがおほかりき

死しても譽れを歌はれき

身はされゝにさかれつゝ

年ふる寺の奥つきに

眠れるかれのなき魂は

あはれいづこを迷ふらむ

かゞり火

上

山又山のそのおくに

かすかに見ゆるかゞり火は

明日は味方の砲臺を

こよひまもれる敵兵が

さむさ凌ぐとたくちらむ

風にひかりのまたゝくは

きえをあらそふ敵兵の

はかなき命や玄めすらむ

かしこの谷間この峯

わが軍隊にみたされて

岩のはざまに木のかげに

もゆるかゝり火色あかく
 残月のかげひやゝかに
 つるぎの霜を照らしつゝ
 夜霧こめたるをちかたに
 飢ゑたる犬のこゑすこし
 鳥もねぐらに夢むすぶ
 山したかげに身をよせて
 手をばかゝりにかざしつゝ
 ふたりの兵士かたらへり
 『いたくも吹くかさよ風は
 あゝわが肌はあはだちぬ
 あゝわが指は氷りたり
 されどもわれは寒からず
 老ませる父を家におきて
 病ませる母を家におきて
 けはしき岩根ふみさぐみ
 千里の外にたゞかふも』

身をばさげし國の爲
 『げにも汝のいふごとく
 われも母あり妻子あり
 ひまもる風の身にしむに
 ほこをまくらのわが旅寝
 いかにと妻のまのふらむ
 歸さいつぞと子は問はん
 さばれわが友、敷島の
 やまをこのこと生れきて
 千載にもあはひがたき
 此たゝかひにゑたがふは
 家のほまれぞ身の幸ぞ
 あな心地よやわが友よ
 思へば胸ももゆるなり
 思へば肉もふるふあり
 死の雨降らむ明日の旅
 血の瀧流れん明日の旅』

下

ふもとをこむる朝霧を
 えるべの風にはらはせて
 かゝやき出づる天つ日に
 林のごとくきらめきし
 星は光をかくしつゝ
 夜はやう／＼にあけんどす
 かのづからなる要害に
 多くのまもりそなへつゝ
 弱しといへど敵兵が
 死をもてまもるこのところ
 日本たけをのをこころを
 いでや彼らに知らせんと
 指をりかぞへ待ち／＼し
 たゝかひいしもはじまりぬ
 天地もふるひ山さげび
 いくその人の血のちがれ

こゝだの人の肉ちりて
 敵の砲台おちいれり
 勇武を示す聯隊旗
 朝日のてらす旗かげに
 かゝりのもとに語らひし
 二人の兵士たてりけり
 ひどりは肩をつらぬかれ
 一人は服も血にそみて

故郷の春

さらでも長き春の日の
 ねぶりを何にさまさまし
 海をわたりてもろこしの
 わたの境にありながら
 まだめざましき戦に
 あふ事なくてむなしくも
 敵の逃れしこの城を

のこりて守るわが大隊
營口あたり今いかに
ふりまざるらむ彈丸の雨
山海關をうちこえて
ゆかんいつの日なるらむ
思ひやるにも腕ふるひ
胸の血汐はをどるなり
残りどまるも攻め行くも
どもに等しく國のため
君の爲どいおもへども
敵なき城にいほりして
たゞいたづらに朝夕を
過す我らのさちさよ
晝のやすみのつれづれに
近きわたりをさまよへば
去年の深雪のむらぎえて

小田の畔道うすくこく
もゆる緑の外にまた
心にとまるものもなし
隠れし民の大方は
歸りきぬれど今も猶
人げ少なき田舎道
をりまがりつゝ行く程に
柳の木立めぐらして
園生もひろき家あり
垣ねづたひにとめゆけば
まげれる竹の葉がくれに
さてもめづらし鶯の
ふしかもしろく歌ふなり
見きくもの皆あれはてゝ
いくさの跡のさびしきを
こゝにも春はとひくらむ
ひとり長閑けき初こゑに

たちまち浮ぶ故郷の
うしろの山の春の空
霞たなびくゆふまぐれ
ささみつ花の下かげに
はしき父母妻子らと
つとひしまとる目の前に
戀しき姿こゝもどに
ありと見るまもうたかたの
はかなくきえておのが身は
垣ねのもとにたゞ一人
おろしゝ銃をとりあげて
ひむがしの空はるくくと
かへりみすれど見えわかず
見ゆるいふかきはるがすみ

幼き大將

『きたれ次郎と兄君の』

呼びたまへるは何ならむ』
さすや夕日のいろあかき
庭の芝生をゆきかへり
身に軍人の服つけて
手なれの驢馬にまたがれる
まだいとけなき男兒は
ひとりごちつゝれりたちぬ
ねぐらに入りし村鳥が
ゆふべの歌をもろごゑに
いとたのしげにうたふなる
桂のかげにつなぎつゝ
『僕はすきなるこの馬に
のりてゐたきをいつまでも。
又もよびます聲すなり
いかなる事のあるならむ』
* * * * *
走りかへれるをさな子を

兄のかたへにむかへたり
かのづからなる要害を
玄めて守りし旅順口
一日二日のたゞかひに
我皇軍のおとしつと
玄らする號外を示しつゝ
皇國の勝利をかたらひぬ
かたるもさくももろ共に
よろこび胸にあふるらし
『さては兄さまはどもなく
敵のみやこもれつべきか』
『北京の都に奉天に
朝日のみ旗かゝやかし
四百餘州をなびかせて
人にすぐれしいさをしを
たてたまひなむ父君は』
聞ゆし次郎のこゑあけて

『わが陸軍の大將と
僕がなりたるそのときに
僕の取る國のこしてと
いうてやらまし父様に』
うちゑみながら『此方こよ』と
兄は未來の大將を
いと大きな油繪の
かゝれる方にみちびきぬ
身に將軍の正装して
名譽の玄るしひまもさく
胸にきらめくますらをい
つよき次郎が父なりき
今は士卒を玄たがへて
東のうみの霸王たる
陛下の御稜威を玄らせむと
戎衣ふく風身をきりて

雁がねさむき朝ぼらけ
九連城をおどしいれ
劍の霜に月玄ろく
あしの花ちる夕まぐれ
鴨綠江に水かひて
とほく千里の外にあり
その油繪のかたへには
世界の地圖ぞかゝりたる
兄は地圖をばゆびざして
『見よや次郎よこの地圖を
こゝに魯西亞の廣野あり
パミールの原ウラルの嶺
汝が士卒引つれて
駒すゝめんによきどころ
こゝに土耳其の海邊あり
新月形の旗じるし

たてにし跡をふみ見つゝ
船どいゆむによきどころ
こゝにあはれなる印度あり
わびしき羈絆につながれて
義侠に富める國民の
たすけすくふを待てるなり
又南洋の諸群島
波風あらし海中の
こゝにかしこにむらがりて
統べなむ主をまてるなり
世界はさのみ廣からず
されどもさのみ狭からず
短かき人の一生に
玄たがへなんにあまりあり』
慈愛のまなこそゝぎつゝ
兄は弟をさとしにき
心地よげにもきゝぬつる

次郎は帽を手にとりて
『さらば兄君あはれなる
印度をすくひに先ゆかん』

村の教師

其一

まだ明やらぬ柴の戸を
たたく水鶏の聲やみて
こなき花さくさく川の
ながれに月の影うすし
夏どいへどうすもの
袖に身にしむわけ方の
かせにまたたく燈火を
そむけて語る母子あり
年は五十路をこゆるぎの
磯のあら浪あらし世を

草むす屍となりぬとも
われはなげかじこの母は
心のこさで君のため
御國のためになすまむ
み國の爲にはをしからぬ
命なれどもいたづらに
死なんのをしき命なり
八重にかさなる白雲の
をちの境のくさまくら
その身にふかくこゝろせよ
母は明日より産土の
八幡の宮に朝なく
いましの武運いのりつゝ
凱歌うたひはまれおひ
歸りこむ指をりて
待ちぞわたらむいつしかと』

渡りし老のいたづきに
面おもいたくおどろへて
折々いづる志はぶきに
苦しき胸をおさへつゝ
『遂に死すべき人の身の
いくさの場に戦かひて
御國の爲に死せんこそ
ますらたけをの譽なれ
思へわが子よ千載にも
あふことかたき戦の
其人かすにくはるは
をのことうまれし幸福ぞ
わが家のもと弓矢とる
ものゝ家のその家に
うまれし汝ぞやよわが子
運つたなくて高麗の野の

いづる涙を見せじとて
曇るまなこをどぢつゝも
またをり〜におのが子の
面わまもりてかたらふに
かみだおとさぬますらをの
心の糸もみだるらむ
母のさとしをかしくみて
さゝるたりつる若人は
『かねて心にまぢわびし
召集の通知の來しよりも
心まきりにいさみたち
はやりたてども又さらに
母の御上のおもはれて
くづをれるしを中々に
をのこにまさる御詞に』

おもひ残さんこどもなし
 父には早くわかれつゝ、
 み恵まげきは、そばの
 この下かげにかくろひて
 人となりぬる後もなほ
 心は千々にくだけども
 憂ふしまげきわか竹の
 うき世のうさに堪かねて
 御心づかひたえぬうへ
 かゝるさびしき山里の
 ましらのこゑを友とさゝ
 峯の松かせ谷の水
 軒端の瀧のあさよひに
 おどなふ外に音もなく
 くる人もなき一つ家に
 母上ひとりのかしつゝ、
 今より後は朝夕の

うすき煙もいかにして
 たてかますらむ唯ひとり
 うしろの岡に鹿なきて
 秋風さむくならむころ
 むかひの峰に炭やきて
 初雪白く見えむころ
 ららでも多病き御身に
 心しませや御身に
 ゆるさせたまへ母君よ
 我は泣てはあらぬあり
 このいさましき門いでに
 不吉のなみだこぼさんや
 文のはやしをふみわけて
 幼き子らに難波津の
 なにはのこを教へつゝ、
 わまたの年を送りしも

わが國民のなしつべき
 三年の兵役をへし身ぞ
 御心安かれ母君よ
 筆を剣にとりかへて
 なき父君の名をもあげ
 家の風をもおこしてむ』
 こぼれかゝれる壁の上に
 かたらふ親子のかげをしも
 さびしくうつせるともし火の
 光いつしかまらみそめ
 かたる詞はつきせねど
 夜はやう／＼に明けんとす
 星はかたちをかくしつゝ、
 白みわたれるひんがしの
 山の高嶺をほがらかに

朝日の影はさしいでて
 林のおくの賤が屋に
 國につくさんますらをの
 いでたつあさと庭鳥の
 祝ひの歌をうたひいづ
 其一一
 牧場にいそぐあげまきか
 柴かりにくる柴人の
 外にかよふ人もなき
 片山かげの離れ屋に
 いかなることのあるをらむ
 けさは訪ひ来る人多し
 樞木生ひたるあせぶたひ
 五人六人うちつれて
 並木の松の下道を
 六人七人うちつれて
 槇の葉がくれはの見ゆる

此山かげに急ぐなり

村の如來と人みちが

あがめたふと僧侶も

村の悪魔と人みなに

いみさらはるゝ若者も

村の舊家とたゝへられ

門を出でざる老人も

村の花どとめでらるゝ

村長が子の女子も

家より見ゆる四方の田を

わがものにせる富人も

千町の小田をたがやせど

われは貧しき小作人も

あるはわかざの杖つきて

あるは帽子を手にて

あるは我子の手を引て

あるは小犬を伴なひて

此山かげのはぢれ家に

つとひ來れりはるゝと

鍛冶も大工も賤の女も

あらゆる村の人皆は

今朝のつとめをやすみつゝ

つとひ來れりはなれ家に

この山かげの離れ家の

けさはいかなる力ありて

あらゆる村の人みちを

引きよせつるぞこゝにしも

其三

利と名とはいかばかり

人のこゝろを腐たすらむ

孔雀の羽をいたゞきて

くらさまなことをいゝらるゝ

法律てふ橋にわれ立て

人をば淵にまづむある

都會の人のゆめにだに

知らぬさかひは田舎あり

都のちまたを去れる事

さのみ遠きにあらねども

片山里に住む民は

今も神代の手ぶりあり

くらき國原てらさんと

天つ光のさしいでし

わが征清のみいくさは

かく質樸なる山里の

人の心をゆくりなく

くるはんばかりうちたりき

神の御代よりうごきなき

神のみ國にあたきすは

にくきえびすと取る鎌を

畑になげうつ民もあり

神の御代よりつたはれる

日本魂をせんと

手にもつ斧をふりあげて

夕食忘るゝまづもあり

日々新聞をよむ人の

家にゆきつゝたゞかひの

今日はいかにと問ふ毎に

どはるゝ人もみづからの

よみしところをいくたびも

くりかへしつゝ語るなり

ひるの休みにけぶり草

ふくまも惜しどかたりあひ

すびつのもとの夜がたりも

みなたゞかひの外ならず

この山里にときならぬ

波のごとくにさわぎてし

人のこころをまづめしは
村の教師のちからあり

村の教師はたゞかひの

詔勅よみつる夜半なりき

村人たちをつとへつゝ

このたゞかひのゆゑよしを

いとわきやすく語らひき

村人たちはふるひたち

はやりながらも常のごと

おのがつとめをいそしみて

家にあまりのある民は

をさめしこがね献り

いへにのこりのなき民は

草鞋つくり献る

村のうなるは栗ひろひ

村の少女は機織りて

えたるこがねをおのがとし
とりあつめつゝさうぐなり

人のふむべき道をしも

いとねもごろにさとしつゝ

まなびの業をたゆみなく

教ふる教師のいさをしに

この一村の若者は

あしきあそびの聲もなく

をさなき子らが親のごと

慕ふ教師はかねてより

豫備のつとめのある身とて

この御軍に召されたり

あるは林をへだてつゝ

あるは田畑を中にして

軒をならぶる隣なく

家のほとほくはなるれど

まじはりあつきひと村は

一つの家にことならず

よきにあしきに聞く時は

とひも訪はれもゆきかひて

我うへのごとつとめつゝ

わが家のごとさわぐなり

あど行きますと子らは泣き

をしき人をと親はいふ

夕べにきよて明日は早

出たちますとこのあさけ

村人みないつせひけり

かた山かげのこのやどに

其四

世をばうごかす英雄も

國をすくむる賢人も

家ををさむる良妻も

教への庭の小松なり

國のもとのをかたむなる

教師のつとめはおもけれど

花のみめづる世の人は

つゆのなさけいよそにして

その身をかざる譽なく

うべき報酬はいとうすし

片山里にすまひして

身を教育のいけにへに

さげしかれば國のため

病たる母をのこしおき

なれし生徒をあどにして

いでたゝむとすこのあさけ

こゝろをうしきたらちねの

泣かぬは泣くにいやまざり

さらばといふも口籠りて

たちうき袖をわかちつゝ
村長はじめむら人に

うちおくられて門をいづ
庭にそびゆる老松も

門を流るゝさゝ川も
このいさましき出たちを

送るに似たり聲たてて
其五

かよひなれたる學校に
教師は先ぞいたりける

天皇陛下の御肖像を
かゝげし前にをろがみて

わが教場に入りたちぬ
ふりにし机五六十

たてる塗板色まろく
いとどころせき教場も

朝夕なれしかたなれば

つくゑに椅子に塗板に
無言のわかれ告げにけり

また廣庭にたちいでて
ならべる生徒に向ひたる

かれのまなこはうるほひぬ
『をさなき諸君われは今

遠き旅路にゆかんとす
諸君をおきてゆくことは

心ぐるしとおもへども
御國のためにいでたつは

日本の國の國民は
國と君との御爲には

いのちをすてゝすゝむなり
次の教師のきたりなば

そのさとしをばよく守り
わがをしへうる時のごと

學びの道をつとめてよ

なほつげたしとおもへども
さらばよ諸君さらばよ』と

いふ聲いたくふるへたり
静かにさゝるし生徒らは

早玄のびえず泣いでぬ
袂に顔をあつるあり

教師の衣にすがるあり
かれのめぐりをとりまきて

忍びねもらす子らもあり
『まだゆくべきはほどはし

あまりに時刻のうつらばと
うながす人の言の葉に

かれは涙をはらひつゝ
『名残つゝねどらわたらば

わかれゆくべし前途には
川もありはた坂もあり

いと遠ければこゝにして

『さ別れん』といひをへて
なれにし庭をいでんとす

『遠きをいかでいとくまか
瀛車に乗ますところまで

共にゆかんと許して』と
こゑをそろへておのがじし

まごころこめし言の葉に
さらば共にとたちいでぬ

いつの程にかつくりけむ
いと大きな天つ日の

御旗をさきに進めつゝ
いとけなき子をおふもわり

幼なきが手を引くもあり
生徒は教師を中にして

まへにうしろに村人は
打たたがひてすゝみゆく

木葉色づく秋の日に

みなうちつれて茸とりし

山も背面に見なしつゝ

雲雀歌へる春の日に

ともに蕨をあさりつる

鎮守の森もあどにして

岩根こしき坂をこえ

流するどき川をすぎ

二里にあまれる遠路を

いつしかつきの停車場

つきぬ別を惜むまに

無情の時はとく過ぎつ

家にのこれるたらちねと

おくれる生徒村人の

いくその思のせたりし

瀛車は遠くはせ去りて

みれくる空にはる／＼と

けぶり一すぢたなびけり

其六

いとねもころにみちびきし

村の教師は軍隊の

勝れし兵士と呼ばれつゝ

かの平壤の戦に

日本男児の名に耻ぢぬ

功を彼は立てにけり

海をわたりて行きつるは

野山の草木打ちをれ

梢の蟬のこゑかれて

あつさはげしき頃なりき

今は雪ふるもろこしの

すさぶ北風身をきと

銃とる手ぶさ氷るてふ

寒ささかひにたゞかへり

明日の軍をおもひつゝ

ねぶるとすれどねぶられぬ

氷の床のうたゝねの

夢はいづこに通ふらむ

若きおや子

胸の勳章のかず／＼は

ひだりに右にどころせく

朝日のかげにきらめきて

ゑみをふくめり騎馬の將

菊の一えた手にもちて

若き母子の墓まうで

にはへる花もつゆけきは

たが雫をかそへつらむ

行くや蹄の音たかき

馬上の人のうしろかけ

子のゆかしげに見つむれば

母はまづかにうつむきぬ

遼東の山

凱旋の兵士むかへんと

村人みないつせひけり

いくその喜びのせたりし

くるまは今ぞつきにける

万歳の聲につままれて

ゑみつゝかへる一むれを

ながめたりしをさな子は

我屋の内にはせ入りぬ

「むかひの家のをぢさまも

かへりませるを父さまは

いかで歸りのおそからむ

明日の瀛車かこの次か

あはれの母は言葉なく

我子いだきて泣きふしぬ

香のけぶりの色うすく

軒のわか竹つゆおもし

いとほしの子よ朝夕に

汝が待わたる父はしも

遼東の山の木陰なき地に

恨をのみてねふるなり

小川の流

小川のながれほそければ

ながれゆく水きよければ

天つひかりもやどりけり

みどりの木々も浮びけり

月光

玉のうてなもてらす奇り

草のいほりもてらすなり

神のあたふるともし火は

誰もひとしくうくるなり

愛の糸

はかき人の玉の緒を

つなぐは愛の糸なれや

親子はらから妹とせの

愛の糸こそまことなれ

まことの道

ほまれと富を身に負ひて

重きくらゐにゐる人も

川原の砂をつみのせて

ねもき車をひく人も

神よりうけし人の身に

貴さいやしきけぢめちく

神のさづくる我職業に

高さひくきいなかりけり

汝がいそしめるそのわざを

いやしと耻づる事なかれ

汗より得つる報酬をば

足らずとかこつ事なかれ

わが同胞をいつくしみ

我身のつとめおこたらで

まことの道とふみゆかば

神の書にぞあるされむ

人のつとめ

山のをのへにをる人も

山のふもとにをる人も

人に差別はあかりけり

よしその位置はかはるとも

高くて低き人あらむ

低くてたかき人あらむ

人のつとめをつくすなる

人ぞまことの人ならむ

冬の夜ちまたを

あるきて

ちまたの霜に月落て

北風さゆる道のべに

からき世わたるつま琴を

すさぶあはれの少女あり

たへなる聲にたゞすみて

聞ゆく人はねはかれど

ふるふまらべをあはれとて
わたひを拂ふ人はなし
それらの人の大かたは
わたしけき衣着たれども

あはれさちなきをみち子よ
汝のわざはつたなきも
いましの聲は悪しども
汝のおもわ美くしく
いましの心みにくくば

なれば中々さちあらむ
錦をよそふ舞姫に
百の黄金は惜しまねど
つれをまとい弾琴女を
恵む人なき世なりけり

今のさかひ

埋火

天つ雲るにのぼりなば
ふく風いかに寒からむ
地のそこひにこもりなば
もゆる火いかにあつからむ
あつからずはた寒からぬ
今の境遇をたのしみて
此世の中に生れこし
れのがつとめをつくしてむし
いづこの山に生たちて
われといかなる契ありて
わが爲にしもつくしつと
わが寒けさをあたしむる
木こりの斧にくだかれて
きりてやかれてはこばれて

跡はかもなく消はてし
いとも幸なき汝が世や

黄金と眞珠

天つひかりも通ひこず
をぐらき洞のその奥に
終日入りて得しものは
あはれ何にかなるならむ

千ひろの海の底深く
數多の貝をあさりつと
命をかけてえしものは
あはれ何にかなるならむ

うたげの場にをどるなる
貴女の腕にかいやり
かたぶく軒にかへりみぬ

紳士の指にひかるなり

ある夜

音せずなりぬ松の風
きこえずなりぬかねの聲
まづかに夜半の更け行きて
眠りやすらむ天地も
み空はるかにながむれば
限もあらずはてもなし
星の林はかげきえて
雲のはてたも見えわかず
ながむるまゝに何となく
さやけくなりぬわが思
やみの内よりあきらけき
光さしくる心地して

蟬に

あけはつるよりくるままで
 いましは何をかこつらむ
 春秋まらぬ生の緒の
 そのはかなさやかこつらむ
 土さへさくる日ざかりの
 その暑けさやかこつらむ
 憂世のうさにたへかねて
 聲のかぎりやかこつらむ
 あはれの蟬よ汝がために
 わがうたふなる歌をさけ
 花ちるうらみ夕かせの
 あはれ知らぬは汝がさちぞ

やくるちまたを人のため

涼しさ賣れる子らもあり

なみだの泉かれはてし

まひて笑へる人もあり

見よやうしろの岡のべを

生まげりたる夏木だち

愛をかたらふ下かげに

撫子の花うちゑめり

心のまゝにそばだてる

をちの高嶺のいたゞきに

どころさだめぬ白雲は

打むれつゝも遊ぶなり

見よやはるけきうまし國

みどりにつゞく野に山に

雨の名残の朝風は
 神の御聲をつたへゆく
 見よやはてなき天つそら
 ゆふべの星はかゝやきて
 きゆるこの世のものの皆に
 きえぬ光をまめします

薩摩守

むかしは保元の春の花
 さかえみちにし樂しびも
 蝴蝶の夢とさめはてし
 今ぞ壽永の秋の月
 傾きわたるこのかげも
 身の行末やまめすらむ
 かばかり門をたゞけども

あけ給はぬもことわりよ

みだれしくしをりなるに

殊にいふせき夜半なれば

されど一目とこゑひく

薩摩守がまゐりたり

五條の三位俊成は

こゑきつつけて出で迎へ

内に入れんと思へども

世のきこえをば憚かりて

門をほそめにひらきつ

あはれゆかしや忠度卿

薩摩守のうれしげに

かゝる身として御爲に

はゝからありとれもへども

一門の榮花つきはてし

都にとまるとかたみ
浪風あらし西海に

いま世中のまづまらば

勅撰の沙汰さぶらはん

八重の汐路にまづみつゝ

やがてきえなんうたかたの

いのちはさらに惜まねと

惜まこの世のおもひ出に

一首なりとも撰集の

中にのせさせたまひなば

身の嬉しさよいかならむ

これぞ年ころ和歌の浦に

数ならねどもおたりちて

かさあつめたる藻汐草

わが身とともになつみの

底の水屑となさんこと

のこりをしさに淀川の

川尻までは下りしが

思ひかへしてまわりぬと

さぐる鎧のひきあはせ

とり出したる一まさと

涙とともにもこの道を

かふるをりにもこの道を

忘れたまはぬ御心

後の世までの御形見と

かならず撰び侍るべし

涙ながらにうちあみて

のぞみたりぬあな嬉し

思ひを雁山に馳すれども

前途の道を程どほき

いと月毛をうながして

ねちゆくかげも西の空

九郎判官

風ふかばふけいとしく

浪たふばたていとしく

よしふく風はつよしとも

よしたつ浪は荒しとも

ともづなとかすやや舟子

舟いださすやいださすや

漕がすや舟子や舟子

かばかりいへどこたへぬは

よし／＼今いたのまじよ

詞をそむく舟子ども

伊勢三郎よ忠信よ

一人／＼に射殺せと

はげしき言葉に楫取も

水主も舟子も打つとひ

こゝにて死ぬもおなじこと

沖にて死ぬやものどもよ

沖にて死ぬやとこゑ／＼に

こゝろさだめてえい／＼と

二百餘艘のその中に

こぎ出したる舟五艘

判官いさみし聲高く

かくすさまじき風浪に

思はぬどころに寄せてこそ

思ふ敵をばうたえずれ

かやりなどもしそ舟見えば
敵もぞ知らむと下知しつゝ
三日にあまれる舟路を
風のちからにたゞ三時

鶴が岡

雪にうもるゝ吉野山
谷のかけみちふみなづみ
別れし君のこひしさに
たちまふべくもあらぬ身は
かへさん袖もなきものを
思へばいともうらめしや
枝をつらぬる中垣も
嵐の風にさへられて
ゆくへいづこと去ら露に
袂のかわくひまなきを
よしや我身は去づたまき

敵にもあらぬ身なりとも
かりそめならぬかの君の
面てふせぞと知りつゝも
いかでかへさむ舞の袖
たわみながらになよ竹の
かへぬみさをの言の葉も
はげしくすさぶ鎌倉の
山下風にをればてゝ
定めつる目と成にけり
霞も霧もたちこめぬ
卯月の空の晴れやかに
齋垣の松の村立も
枝をならさず去づかにて
小鳥の聲もれもしろし
神の廣前ひまもなく
右に左にもの見むと
そでうちたれて武士の

つとへる中をたちいでし
心よあはれいかならむ
静その日のよそはひは
割菱ぬひたる水干に
精好の袴ふみしだき
太刀よこたへてからあやの
色こき衣をかさねたり
ゆるくむとべるかうぶりを
みだるゝ髪のかぐろきに
かゝるは何の露ならむ
花のおもわはとおろへて
匂へるまみもおもげなり
去らべそめたる物の音に
やをら扇をととりあげて
袖なつかしくひるがへし
去ばしがはどは打かきで
歌ひ出たるその歌よ

峰の白雪ふみわけて
入りにし人のこひしきに
去づのをだまきくりかへし
昔を今になしなばと
涙にくもる聲ほそし
老將軍
劍をふるひし彼の手に
幼なき孫をいだきつゝ
敵を退けしかれの聲
低くやさしく成にけり
かぞの水田數町歩
賤の童どもろどもに
やぶれし帽をいたゞきて
日々に草ざりたがへしぬ

百舌が音さむき明がたは
世よなき友をおもふなり
釜の湯たぎる夕ぐれは
幸なき敵を去のふちり

うちゑむおもわ白きひげ
昔のさまいなければ
今もむかしにかはらぬは
國を愛するこゝろのみ

納豆賣

わりご携さへ學校に
かよふ道にてあひしとき
豆うりありく彼いしも
老おどろへてありたりき

くるまにのりて學びやに

歌へにかよふこのころも

おなじ道にて朝なさな
老たる彼にいであひぬ

あはれ翁よいつまでか

その身体むる時もなく

氷るちまたをありくらむ
もゆるちまたを歩くらむ

老僧

寺のうしろの山かげに

老たる僧はたゞひとり

みじかき鍬を手にとりて

桃の若苗いくもとを

くりの若苗幾もとを

去年もうゑけり今年また

花さく春をめでんとか

みのらむ秋をまたんとか

いなく己に年たけて

明日の命も去られねど

又こん年も世にあらば

彼は植うらむ若苗を

織子のおもひ

年ふる里をわかれつゝ

この足利に來にしより

雁はかへりて雁は來て

早も三年にかりにけり

國の訛ををかして

笑はれつるもいくそたび

わさつたなしと友達に

いぢめられしもいくたびか

をうらむとこにたへかねて

こぼるゝ涙おるきぬの

上にもしもや落さばと

背くる顔に風さむし

愛宕の山の春の花

さかりときくも人づてに

月見が岡の秋の月

行き見し秋はあらずして

をゆびも氷る朝まだき

人のふしどにあるころも

肌もゆるゆるゆふまぐれ

人のそゝみにゆくころも

機臺のもとによりそひて

たゆむまもなくれる衣よ

あはれたが身をかざるらむ

何處の人をよそふらむ

今二年の定め年
つとめをへんをたのしみに
八聲の鳥のうたふより
ねよどの鐘のひびくまで
右に左になぐる飛の
幾よろづたびくり返し
一つの衣はれりなせど
やがて彼方にはこばれつ
年老ませる父母に
織りつるさぬを一つだに
さげまほしと思へども
今の我身にまゝあらず
いともまれなる休み日に
おなじ友だちうちつれて
おひひめ山にのぼりつゝ
四方のけしきを見渡せば

渡良瀬川の水清く
色みどりなり田中山
山のかたちゆるるさとの
向ひの峰に似たれども
水のながれゆるるさとの
うしろの川に似たれども
たい父母のこの里に
いまさぬこそはわびしけれ

旅商人

その上

野こえ山こえ越ゆきて
ゆく里ごとく家ごとく
心ならずもうちあみて
細き利益をもとむるも
いとしきものゝ生の緒を
つちがんだづきとばかりに

たよりよき世はうれしきも
我等の爲はわびしくて
重き荷せおひ朝にけに
勤むとそれいかにせん
脚絆をぬらそ夕つゆの
つゆばかりなる収益のみ
村のまつりよ花見よど
打つれだちて打むれて
樂しむ頃もかしの實の
ひとりはなれし草枕
旅より旅にさそらへて
年のなかばを送るなり
あはれといひて哀なる
旅あき人はたゞひとり

くらき旅宿のともし火を
またしむ如くあがめけり
相宿りせるたれかれは
夢見の里におもふきて

ねよどの鐘はさゝつれど
なごか今夜は眠られぬ
おもへば夢か苦も樂も
貧しきみに苦はあらで
富たる人はなかくに
まことの樂を知らずとか
あるが上にも増しそふと
たえず心をやますあり
黄金は藏にあふれても
家繼がす子のなきもあり
事の足らぬを足らぬにて

我には子あり妻もあり

出るを常のかりはひも

惜む妻子にわかれつゝ

門をいでしは梅の花

枝にこもれるころなりき

花ささみちて花ちりて

今は青葉に成にけり

を指をりつゝかぞふれば

月日の數ぞつもりぬる

今日か明日かと妻も子も

いかに歸さを待つからむ

濱べの家のみさびしきに

浪の音のみさびなれて

端午の節句のくる頃は

歸りきなんと契りしを

をさなごころのひとすぢに

職たてゝむかざらむと

磯うつ浪の立ちつ居つ

困らせをらむたらちねを

こたびの旅のさちありて

たづさへきぬるくさくも

残り少なくなりぬるを

一たび家にかへらむか

祝の日にはほどもなし

いでや一度かへりてむ

五月雨ごろのさ夜風の

吹入る壁にうつりたる

やつれ姿をかへり見て

枕につけばありくゝと

浮ぶ吾子の笑ひ顔

耳にきこゆる妻の聲

その下

百のいかづち一どきに

ねちくるごとき音たてゝ

山より高き高潮は

忽ち陸によせ來つゝ

町をも田をも家居をも

あらゆる物をのまんとす

わたつみの神の大宮に

いかなることかおこりけむ

情も知らぬ浪の手は

すぎゆく道のものみなを

海原とはくはこぶべく

ひろげわたしぬ數十里

數千の家數万の人

一夜の程にうせにけり

天つ御神のはかりなき

大御心はえられねど

あはれいかなる答ありて

下しましけむ禍つみを

昨夜のけしきにひきかへて

空さりげなき朝づく日

浪間をはるかにさしいでて

四方のあはれをてらそなり

陸には人のさまよひて

海には家のたゞよひて

別れし親を去たふあり

失ひし子をかこつあり

いづこの里も家ごとくに

祝ひし昨夜の酒みつき
くみかはしつるさかづきは
やがてわかれの宴にて

何すともなく道のべに
たふれふしたるをのこあり
吾子の行方尋ねわび
憂ひさまよふ翁あり
むしろ死ぢぬを恨みつゝ
一人のこれる老女あり

餓いせまれど食はなく
きずいたためど薬なし
たそかりぬべき病人も
見る目の前に世をぞ去る
もしも地獄の世にあらば
かゝる方をぞいふならむ

樂しき節句にあはんとて

旅あき人はいそぎしも
えさらぬことにさへられて
一日おくれしいひわけを
とや言ひてましかくせんと
胸にゑがきてかへりきぬ

浦島の子がすみの江に
かへりきにけむいにしへも
かゝるなげきいさかざりき
あたりを見れどあがむれど
家も見えす里もなし
吾子はいづこ我妻は

かねて玄たしき村人が
物のくまぐらちながめ

そぐるを呼びて問ひきけば
きくことごとになみだのみ
我身ひとつのがれしも
母の亡きがらもとむとぞ

あまりに深きかなしみに
夢かあらぬかたどりつゝ
かどの柳のたふれふし
藻屑かゝれるかたはらに
空をあふぎてつくろいと
旅あき人はたてりけり

童あり

すさまじく
押よせ來ぬる大水を
こゝの堤にふせがむと
村人あまた馳せちがふ

けふもまた

父は朝より酔ひふして
繼しき母はかつとも
のこれる器取りをさむ
とくゆけど

いはれし詞否びかね
川にそひたるおくて田に
童は行きぬたゞひとり
大水の

やゝ引きそめし森かげに
蒞つる稻をいだきつゝ
おぼれ死にたる童あり

愚なる幼子

いとほしの子よ汝が爲の
すくひの神はいかでかは
(近きわたりには痴の童見ありなき母の
名を呼びつゝ日々門へをすぐるを見て)

汝をこの世にのこしおきて
ひとり雲路に入りぬらむ

いとほしの子よ朝よひに

汝が戀渡るたらちねは

あはれいましを抱きつゝ

再び泣かん時あらじ

笹まくら

(加賀國にもものしける時)

いでて久しき故郷に

歸りし夢はやぶれつゝ

やぶれし旅の衣手を

荒らくも吹くかさ夜嵐

物の足音みし〜と

ふみならしくる心地して

われたる家のさゝ枕
一夜のふしもやそからず

旅中の作

打見ねるせば谷せまく

打見あぐれば空ひろし

水はみどりに山青き

この繪はたれかゑがきけむ

白き色紙の雲紙を

日かげは赤く色どりぬ

たれ筆とりてこの上に

消えぬ言の葉をそらむ

越前にものしける時

右に左に谷川の

清き流のみをざりて

夕日かたよく山陰に

なくひぐらしの聲たかし

送別の歌

(徳富精一郎君の歌米にものせらるゝ時)

人やりならぬたびごろも

日かすかさねて外國に

國のまことのひかりをば

いかにか君がまめそらむ

東の國のまれ人を

ゑみてむかへん海山は

君がゆたけき筆にしも

いかなる色をそへぬべき

底のうしほは流るれど

鴈ねぶれる海のおも

渡もおこらず風もあし

舟出せんにいよき日頃

行け速かにゆけよ君

かりそめならぬこの旅を

なぞいたづらにといむべき

人の世もまた旅なるを

籠の虫

(亡き姉君の八才にてよみました歌「山
里の人にもらひてかけわきし籠の鈴虫
なきにけるかな」)

まことを寫そうつしゑの

業しひらけし世なりせば

唯一人なる姉君に

まみえむそべもあらましを

たもとの露のたま祭り

心ばかりとかよげたる
みあかしの火もまめやかに

秋の夜いたくふけにけり

老たる乳母がかたらひし

昔がたりをまのふれば

やさしかりつるみ心の

いとこひしき中にしも

病みふしまし床のべに

まぢかき虫の聲きゝて

うたひましつる言の葉の

あはれぞいたく身にいしむ

あはれ今夜の手向にど

まがきに放つ籠の虫

さすがにまばし立ちさらで

なくか小草の葉隠れに

いとしの虫よ汝が聲の

地の底にもとゞきなば

われにかはりて姉君に

まのふおもひを告げなむ

さ夜風

(弟昌綱の病をつくるふとて安房
の國北條に物せるを思ひて)

鏡の浦のうらづたひ

みやこのそらを忍びつゝ

さやけき今夜の月影を

ながめやすらんだ一人

月のひかりのながむとも

よわき其身に心して

とく歸れかし海をひ

さよ風いかに寒からむ

田家の秋

雨にあらしに心して

待わたりつる賤のをに

神は今こそ興へつれ

かりいれ時のたのしさを

こがねの色のうるはしく

ねもげにみのるれくて田を

刈りつゝ歸るまづのを

おもわにゑみりあふれけり

我子の土産に手折ゆく

野川の菊咲みちて

妻が迎ふる門のべの

櫛の立枝は色あかし

一つぎの酒のみほして

妻子と共に身をよする

るろりのもとの天地こそ

誰が天地にもまさりけれ

樵夫の家

高嶺のこする月さえて

夕霜氷る山路を

こりし椎柴せおひつゝ

木こりは家にかへるなり

世をはなれたる一つ家に

吾夫一人をたのみにて

待るし妻はうれしげに

ゑみをこぼして迎へけり

『明日は雪にやなりをまし

こよひの風の寒けさ』と

吾夫のれもわつくぐと

いとほしげにも見あげつゝ

つかれし足をどくどくも

すゝぎませよとまめやかに

妻がとる湯はぬるけれど

そふる心のあたけく

あたゝめたりし粟の飯

心は足りて終日の

憂さもつらさも忘れつゝ

圍爐裏のもとによりそひぬ

木枯の風あらゝかに

嶺の梢をまをれども

ふもとの庵の窓のうち

春の光ぞみてりける

古戦場

あさちよもぎにところえて

すたくすゝ虫くつわ虫

それとまがひて聞ゆれど
駒のひづめのれどもなし

ゆくてにたてる旗すゝき

昔のさまにちびけども

どひくる人のかげたえて

風のあはれをうたふなり

洪水

里人あまた馳せちがひ

ならず早鐘れとすぞし

日頃の雨はやみぬれど

あふれくし大水は

かしこの堤越えはてゝ

この堤によせむとす

騒ぎを外にたゝすみて

水のけしきをながむるの

となりの村に名も高き

地主の妻とその少女

をどめの姿うるはしく

妻のよそほひ清げなり

『常に我等をまひたげて

なさけをまらぬ彼地主

それにともなふかの母子

憎さも憎しいざやいざ

かゝる無慈悲の二人をば

水の御神にたてまつれ』

誰いふとしもなければ

口より口につたはりつ

心はやりしさと人は

水のふせぎを打すてゝ

二人を中にとりこめぬ

呼べど叫べどかひなくて

今かあやふく見えし時

吉とよばれしれろか者

愚なれどもかねてより

人にすぐれたちからに

さゝふる人をわしのけて

二人を遠く去らしめぬ

『いかで我等を妨たげし

唯痴れと打笑みて

二人のかげを見送りつ

うづまさよする荒浪の

中にすがたを隠しけり

春風春水

木のめけふれる森蔭に
まづかにうたへ春の風
匂へる花のかげとめて
まづかに舞へよ春の水

燕

昨日に今日と人ごころ
かはりもてゆく世の中に
去年を忘れず今年又
古巢を訪ふかつばくらめ

花すみれ

うそむらさきの汝が袖に
あしたの風ゆゆるく吹き
雲雀の雛は汝が床に

ゆふべの歌をうたふなり

たのしき春をまめなして

うきふしなげに見ゆれども

いともやさしきその胸に

いくその思つゝむらむ

さびしき野邊の草かげに

涙ふくめる花すみれ

見る人なくて今年また

春も今いとくれてゆく

春の風

柳の髪をみだしつゝ
花のまほひをこぼしつゝ
うら若草のとしめて
まづかにねぶる春の風

虫の聲

萩が花 かざしゝ子らも歸りけり
鷹すゑて 狩せし人もかへりけり
松の風 音まづまりて日はくれて
廣き野は 虫の聲とどなりにける

月八首

対 月
こゝろにうかぶ塵もなし
こゝろにかゝる雲もなし
さやけき月にむかふまね
うきよのほかの心地して

月 明

たいよふ雲はをさまりて

光四方にぞみちにける

月の都の宮人は

うたげすらしもこの夕べ

林 月

ねぐらあらそふ村鳥の

さわぎいつしかたえはてゝ

栗の實ねつる里林

まづかに月のかげふけぬ

海邊 月

沖の島山たかの鳥

さ霧のひまに見えそめて

鏡の浦の浦波に

月のかゝみはうかびけり

水邊 月

おちゆく鮎のかず見えて

浪にくだくる月清し
かゝる夜半にや昔人
玉川としも名づけらん

山家月

垣ねのま萩花ちりて
鹿の音とほき夜半の月
心さへすむ山里の

哀は知らじ都人

月下砧

さやけき月やながむらむ
泣く子に乳やのますらむ
たえてつゝきて又たゆる
遠里とほざきの小野のさよぎぬた

月明星稀

わが大君のいでましに
皆ひかりをやかくしけむ
月すみわたる大空に

きらめく星のかげもなし

軍 營

つゝくいくさにつかれけむ
鎧の袖をかたしきて
えばしと眠むるつはもの、
枕にちかし虫の聲

いざ起きいでよとく起きよ

敵あだやま近くよせくらむ

夜霧のつゝむ薄原

駒のひづめの音すなり

ひろげし書

千くさにはへる秋の野に
あそぶと見しは夢なれや
ふけゆく窓のともし火は

木々は錦の衣ぬぎて
白きふすまに春をまち
落葉のつゝむ谷水は
さゝやきやめてうまいせり

冬の山

ひろげし書よみをてらすあり

鶯も雀もうぐひすも

れのが梢にこもるとき

いかなる夢かむすぶらん

えづかに眠る冬の山

朝の風

日もまだいでぬ大ぞらを
えづかにわたる朝の風
ねぶりさまし、野に山に

神の御聲みここゑや傳ふらん

田家の暮景

むかひの峰の夕づく日

水田のれもにかけれちて

家路にいそぐ賤のをの

つかれし面わあはれなり

稻村がくれさわぎつる

小鳥のこゑもえづまりて

田中の森の木がぐれに

見ゆるともし火三つ二つ

長良川

水清き長良川の流に船を浮べて鶴
飼の奇観を看しは、八月十六日の
夜なりき。歸途 浅井、中村、奥津、

箱根、逗子等にいたりて歸京せるに、其夜かの地洪水の報道を得て、感殊に深し。直に筆を取りて、空しく底の藻屑と消え、土の下に埋もれはてし百余人の靈をとぶらふ

明治二十六年八月廿五日の夜

うつろへる山のすがたは
水の色にひとしくありて

并み立てる峯より西に

三日月のかげいとほそし

長良橋うちわたりつゝ

まうけたる小舟にのれば

川風は身にまむまで

まろたへの袖なびかして

ひるのまの暑さも知らず

行く水の清きながれに

四つ五つともづなとくは

もろともに見る舟をらむ

くれてゆく景色めでつゝ

川づらをのぼりくだりて

みな人のねなじ心に

いつしかとまち渡るまに

月かげのはやかたぶきて

うちむかふ山のかたちも

うちわたす峯の木立も

さだかにわかす成りつゝ

舟のうちにかけつらねたる

ともし火のひかり明きに

むやひたるとなりの舟に

こま笛の聲もれそめぬ

もろこしの何がしの江に

調べけむそれならねども

何となくをりなつかしき

つくづくとさゝるし程に

ほのかにも薄きひかりは

いと遠く見えそめにけり

川くまの山下かげに

かつづもかゝやきそめつ

かたりあふ聲もまづまり

こま笛のまらべもやみて

おのがじしまもらひをれば

やう／＼に近くなりつゝ

年魚追ふと船板敲き

舟七つこぎくだりきぬ

かゝり火は波にちりつゝ

時ならぬ花と見ゆるに

さしはへて又引きよせて

鶺鴒つかひがさばく手綱も

もゆる火をまたひよりきて

とふ魚のまろかねの色も

舟ばたにのぼらんとして

水はらふ鶺鴒の羽ばたきも

とり／＼にあかぬ眺めは

いひいでん言の葉もなし

めづらしくあかぬ景色ハ

たどふべき言の葉もなし

ふけゆけば鶺鴒もつかれけん

かゝり火の光もうすれ

舟た／＼く音もとだえて

いつしかもをへなんとするに

樂しさはいまだ盡ねど

さらばとて舟を下して

川ぞひの旅の宿に

旅枕とるといすれど

水清き川せのながめ

めのまへにうかびいでつゝ

いひまらぬかゝりの光

れもかけにたちてぞ見ゆる

山をこえ海をわたりて

歌まくらさぐる旅路に

さま／＼に心とまりし

方いしもなきにもあらず

玄かれどもこたびの旅の

たのしさは此處につきぬと

たづか杖東にむけて

かへるさは道の便たよに

中村のふる寺訪ひて

虎の臥す唐國たうこくまでも

わが國の御稜みかさ威示し、

ますらをの昔をれもひ

波清き三保の浦わに

海士小舟こぎめぐらして

不二の嶺をふりさけ見つゝ

羽衣あまびとをかけし天人

玄のびつゝありける程に

をやみなく雨のふれども

こゝかしこ猶見めぐれば

旅衣ぬれてかわきて

こよろぎのいそぐとなしに

都路にかへらひつきぬ

かへりきてきゝて驚きぬ

風まじりふりにし雨に

ながら川水かさまさりて

こゝだくの人も家ぬも

行く水のみなわどきえて

いひえらぬ景色めでつゝ

わたりてしかの大橋も

わたりぬし人を載せつゝ

あともなく流れはてきと

さかりぞどながむる花の

吹きさそふ嵐もまたで

時のまにうつろふ見ても

さやけしと見あぐる月の

うき雲にねははれそめて

見るが内に隠るゝ見ても

玉ゆらにかはるをつねの

世の中と思ひえれども

あまりにもはかききものは

むすぶまもなく消え行く

水の上のうたかたの世や

あな哀あはれいかでか

やぶしわかぬ天つ恵は

かの國の人につれなき

まがつみの神のあらびは

いかでかく彼國にしも

年としごとに重なりぬらむ

一昨年おととしの地震ちゆうぶのまどひに

あるはやけあるは崩れし

家くらすをつくろひかねて

わびあへる人ねほかれど

世の中はさてしもあらで

たふれたる棟むね立てれこし

やぶれたる軒端のきつゝて

かつかつも家いへににき

朝夕あすけの食具けしぐのうつも

やうやうに整ととのへまりき

かくてこそ千年の家いへ

安やすくぬる千代ちよのすみかど

みな人のねもたのみて

よるこぼひありけん物を

みなかみの雨あめいかばかり

あらましく降ふきりけん

ながれくる水いかばかり
いきほひの鏡どかりけむ

はた、神はた、く頃に

みやこべの暑さをさけて

景色よく温泉わきいづる

山のべに家ゐるをきづき

汐風の絶ず吹きいる、

海どひに高どのつくり

海山のよきをつとへて

一たびの夕食のゑるに

わび人が家をさゝふる

一月の黄金をつくし

一升にうりかふ米の

あたひをも知らざる人は

こがねてふ物のあたひを

まことにいゑらすぞあるらし

水無月のてる日ざかりに

小山田の田草とりつゝ

玉の汗まばりてもなほ

得がたきはこがねなりけり

降る雪にこゆる足を

氷る手をまひてすゝめて

車ひくをのこを見ても

尊ときいこがねなりけり

とくれきてねそく臥しつゝ

あき人は市路にいでて

賤の男は田の面にたちて

れのがじし我なりはひを

朝夕にいそしみつとめ

纒にも得たるこがねに

子も孫もすまんどころと

まさ柱ふとしきたてゝ

うれしくもつくりし家居

住のきていくばくならず
さながらに流れうせけむ
家ぬしの思よいかに

つくるべき時えぬきは、

月毎にれこたりがちの

家の賃せめはたられて

寄居虫なす借りし住居も

家のうちにありしもの皆

あともなく流れゆきつゝ

家なくてさすらへをらん

わび人のなげきよいかに

大水よ堤きれぬと

みな人のうちさけぶまに

山よりもたかき大波

すさまじく打よせ来るに

子は親をれやはわが子を

もろどもに助けあひつゝ

のがれんとひしめくほどに

門ちかくせまり來りぬ

見るがうちに垣ねをこえて

窓の中にたゝみのうへに

よせくるをふせぐすべなみ

つゝり衣着たるまゝにて

からくしていのち拾ひし

わび人のこゝろよいかに

一昨年は野わき吹きたち

昨年いしも地震の後とて

田も畑もみなあせはてぬ

今年だにみのりよかれと

祈りてしゑるしまさしく

とみ草のみのりよろしみ

とよ年の秋をたのみて
朝な〜れのが門田を
ながめつゝ喜こぼひぬし
賤の男のなげきよいか

水ひきしあとにて見れば
春雨にゆだねまきつゝ
梅雨にぬれて植ゑ渡し

日ざかりに田草ぬきとりて
ひたすらに秋まぢわびし
稲いしもいづち行きけむ
莖だにもこのりてあらず
切れたりし堤の跡は

いと低くくづればつゝ
田も畔もみちも田川も
はる〜と見渡すかぎり
くろく赤き水田となりて

かたぶきし入日の影を
やどしたる名残の波の
吹きわたる夕べの風に
さら〜と流れゆくのみ

我家をいかにと見るに
れそろしきかの大地震は
れもひても肌いよだちぬ
まかはあれど迦具土の神の

あらびなきどころ〜に
けた柱たふれしまゝに
さながらに残りてありき
あはれこのこの大水よ

いさゝかの跡だにも奇く
家の内にありしものをも
家ごめに流しめてゆきぬ
地震よりもまして俺しやど
よろばひてわづかに残る

杉がきのもとにたちつゝ
村がらすねぐらもとむと
さびしげになく聲きゝて
我家のむなしきあとを
ながめゆる心よいか

川そひの市のあき人は
大水のひきにしのちに
我家にかへりて見れば
多からぬたからつくして
あがなひしなりはひの代の

大方いながればつゝ
壘には蚯蚓はひをり
天井にいなめくち上り

屋の上に藻くづかゝりて
壁のみなはらひ落されぬ
いづかたの家の形見か

庭見れば木のきれ浮び

さま〜の物奇がれきて
たへがたく悪きにほひの
何處にもみち〜てけり
かわかざる簀子にいでて
この景色うちまもりをる
いへ人のこゝろよいか

たくはへし物みなうせて
飲みぬべき水だにもなし
いかにして目を送らむと
打まどひれもふをりしも
うれしくも救ひのあるに

めぐみをばうけぬるものゝ
飢ゑて泣く子のあはれさに
ねほかたひあたへつくして
をさな子のうちゑむ見たる

垂乳根のこころよいか

長良揖斐木曾の大川

國のうちを流れめぐりて

水の憂れほくはあれど

れのが経し六十年この方

かゝる事いまだ見ざりき

一昨年の地震だにあるに

今年またかゝるわびしさ

いのち長く生きながらへて

からき目に逢へるかなしき

ひとり子は行方を知らず

僅なる田は跡もなし

今よりいのこりのよはひ

いかにして送りてましど

かこつらむ老人いかに

あはれてふ哀のなかに

いたましき事のかぎりは

流れ速き長良の川の

上つ瀬の里にぞありける

風まじりふる村雨の

日をへても晴れやらすして

川水の溢れんとすれば

警鐘をうちまきるまに

水のはやちまたにみちて

川橋のみなれちはてつ

家々もれし流されぬ

人々のあわてふためき

くらすき夜の闇をたどりて

いとちかき山にのぼりぬ

此處に居ば水もよせじと

みな人のたのみ居けんを

はのくくと夜のあくる頃

天地のくづるばかりの

恐しきひいきなしつゝ

其山のくづればてにけり

その山にのぼりぬし人

その山のふもとの家居

家の内にこもりぬし人

家の外にたちいでし人

さながらに身は生きながら

土の下にうづもればてぬ

さいはひに残りし人の

山かげはいとあやふしど

わが家に歸らんとすれば

あともなく流れはてつゝ

たよるべき方しおければ

たらちねの髪まさぐりて

負へる子の乳よど泣くを

すかしつゝたてる妹と背

ゆく水のながればげしみ

家はあれど行がたければ

もろ共に手とりかはして

水のうちにさけぶ兄弟

とりくりに悲しびの聲は

流れ行く水にひびきて

うつゝなる世どもおぼえず

水のやゝひきにしのちも

ゆきせん道は崩れつ

山ふかき里にしあれば

朝夕の食料もつきはて

飢にせまる人多しとぞ

あはれ今おもひやるにも

涼しやとめでし川浪

をかしやとながめし鶺鴒飼

今いしも心をさりて

みなぎりて落つる川水
 さすらへるわびしき人の
 すがたのみ浮びいでつゝ
 たへがたくなかなしきものを
 そのさまをまのあたり見る
 みな人のこゝろいかならむ

たへかねて窓れしひらき
 外の方をうち見いだせば
 知らぬまに日はくれはてゝ
 いつしかも夜のふけぬらし
 星のかげ三つ四つ見えて
 かたわれの月の光り
 わが庭の松の木末に
 さびしげにひとりかゝれり
 老松の木のまをりて
 すさまじくやみを照せり

れりたちて庭をあるげば
 身にまみてさゆる夜風も

遊びてし夜半れもほえて
 いとしく悲しさたへず
 かへり入るわが衣手に
 はら／＼と雫こぼれぬ
 我心をいゝるにゆきて
 わが袖にれちし雫は
 子に別れ親に後れて
 去たふらん人の涙か
 やどるべき家のながれて
 ちげくらむ人の涙か
 はたやばたみ空くもりて
 村雨の降りか來ぬると
 大空をわふぎて見れば
 いさゝかの隈だにあらす
 すさまじくやみをてらせり

さびしげにひとりかゝれり
 あはれこの月のひかりよ
 あはれこのさやけき月よ
 ぬれはてし人のたもとに
 いかさまに宿りかすらむ
 屋根もなき草のまくらを
 いかさまにてらしかすらむ
 あはれこの月

銚子に物とける時

途上の作

はる／＼とつゞく並木の絶間より
 船の帆みゆるまつぎしの里
 銚子なる川口明神にて
 立かへり見るともわかじ海に入る
 どねの河原のみづのまら涙
 高神村にて

わたつうみの百波千ちみ風なきに

たれ動かして寄せ返るらむ
 雨はれしあをうな原をいろどりて
 つゞく白帆やかつをつり舟
 大岩にくだくるなみのいろみえて
 夏をほさむき月のかげかな
 本土の東端なる雀岩のもと
 にて
 ひむがしのはてなる岩に舟よせて
 のぼる朝日を今日みつる哉
 箱根に物とける時
 早川のはどりに宿りて
 早川の瀬の音は去年にかはらねど
 又わたらしき心地こそすれ
 天地もねぶれる夜半のわがむねに
 さゝやく如き水のおどかな

歌學會廣告

歌學會は、和歌を研究し、斯道をいよく盛らしめむとて、諸名家の贊助を得て、起せるなり。

歌學會は、雜誌いさゞ川を、毎月發行す。また毎月、課題及競點の題を出し、贊助員の撰を経て、いさゞ川に載す。

いさゞ川は、玉がしは(名家の歌論)さゞれ波(名家の和歌)藻かり船(新體詩)苔むしろ(和文)言葉の園(會員諸氏の和歌)やちくさ(歌界時報及評論)の數欄にわかつ。

われらい希望は、ふるさつをさきはめて、新らしき道をひらかむとすにあり。短歌をいよく發達せしめむことをはかると共に、長篇の歌をも、またよろこび迎ふるものなり。

斯道の爲、あまねく全國諸士の入會をこひねがふ。猶委しき事は、とひおこせ給ふ人に規則書を送るべくあむ。

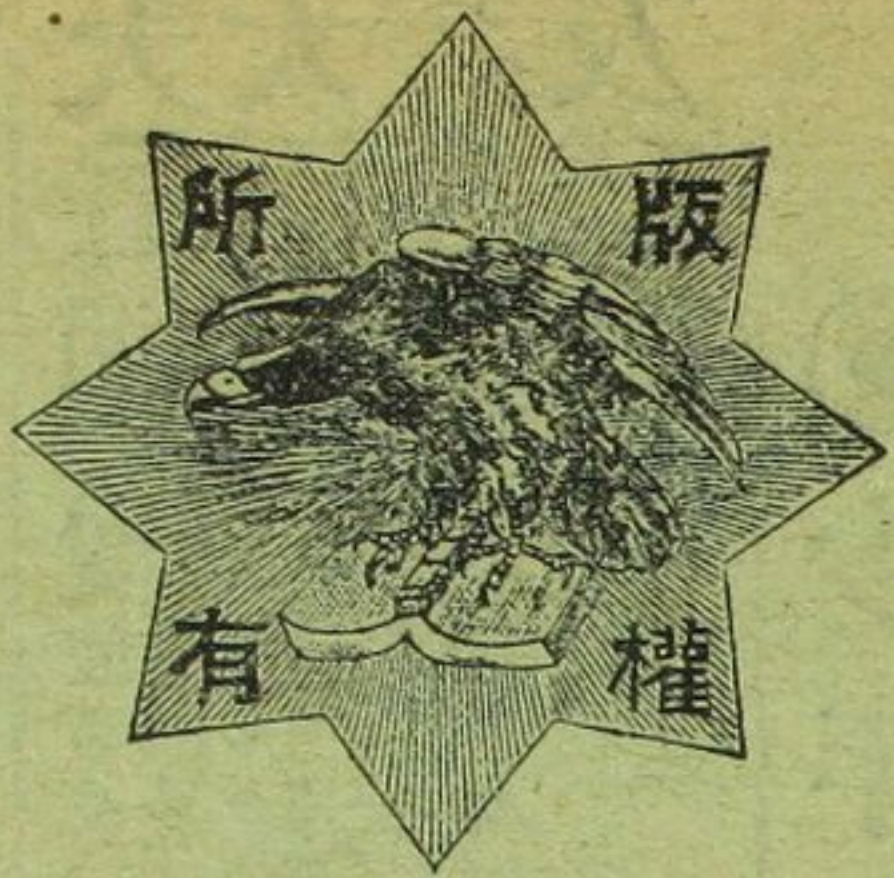
ゆきく〜て海といならむいさゞ川
人にえられぬながれなれども

明治三十年八月

東京神田小川町壹番地 歌學會

明治三十年九月三日印刷
明治三十年九月六日發行

定價金 拾錢



發行者 大橋新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 多田榮次

東京神田區小川町壹番地

印刷所 愛善社

東京神田區小川町壹番地

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

電話本局 二百三番

少年叢書

每月二回發行
 正價 ● 壹册金拾錢 ●
 ● 六册前金五十七錢 ●
 ● 十二册前金一圓八錢 ●
 ● 郵税一册四錢

天真爛漫 修めず、飾らず、敏捷に、活潑に、勇往直前、未來の
 大臣 此中より生ず。此等大有爲の少
 未來の大富豪 年を鼓吹し智識、勇氣、學問、道
 徳を涵養す。人物傳、冒險談、作文書、
 少年叢書 現はる。人物傳、冒險談、作文書、
 少年の良 友たるべき珍書は、收め
 友 たるべき珍書は、收めて皆な此中に在り。

少年叢書 自第壹編 目次

- 第壹編 英武蒙求 全壹册
依田學海翁著 古今武人の快更なる談話を集む文壇の老将學海翁の筆に成れば直に其境に臨むの感あらむ
- 第貳編 少年詩話 全壹册
野口寧齋君著 詩を學ばざれば言ふこと勿れさば古人の金言本書は平易明暢に詩を作るの秘訣を述べたり

西理學士著 ● 第參編 科學雜談 全壹册
文明の要素は理科學にあり本書は殊に興味ある談を集めたれば一讀怡心兼て智見を長せむ

中島竹窩君著 ● 第四編 臺灣探檢記 全壹册
臺灣の生蕃今や皇威の下に同じく日本國民となれり抑も如何なる風俗習慣やや本書に見よ

小倉秀貫君著 ● 第五編 加藤清正 全壹册
希世の英雄加藤清正の名は人皆之を知らざるはなし然も其詳細なる事蹟は本書始めて之を語る

大和田建樹君著 ● 第六編 少年立志篇 全壹册
男兒志を立て郷關を出づ碌々爲すなき耻たる大なり本書録する所東西の英物皆好師表たり

小宮山綏介君著 ● 第七編 洋學大家列傳 全壹册
徳川時代早く活眼を開いて洋學を研究せし諸大家の傳を集む文明の先登欽仰せざる可らず

尾上新兵衛君著 ● 第八編 軍人生活 全壹册
軍人と爲りて國家に酬ゆるは男兒の大責務又大名譽なり諸子本書を讀て海陸向ふ所を選べ

中川霞城君著 ● 第九編 少年遠征 全壹册
好個の少年暑期休暇を利用して熱帯地方に冒險的遠征を試たる快話讀來神氣を爽ならしむ

佐々木信綱君著 ● 第十編 少年歌話 全壹册
詠歌社會に名聲噴々たる佐々木君の著なれば周到的切言を俟たず玩讀容易に歌入たるべし

久我建通侯題辭 木村正辞君序文
小杉楳邨君題詠 宮澤春文君著

作歌自在

全壹冊美裝 正價金貳拾錢 郵稅六錢
◎木版彩色畫：清少納言 寺崎廣業筆
◎寫真銅版畫：落花撲袖 川邊花陵筆
◎富士の下道：多摩川の鮎釣：日光一の瀧：京道上加茂御手洗川

本書は、初めて歌をよみ習はんとする人の爲めに、著はしたるものにして、和歌の起原、沿革、變遷より始めて、和歌の種類、和歌の心得、文法大意、假字遣、枕辞、和歌書方、屏風貼方、歌會、作例等に至る迄、各部門を分ちて、詳細に演述したり。されば眞に歌詠んとする者の爲めには、こよなき良書と云ふべし。

大和田建樹君著

應用歌學

全壹冊洋裝 正價金拾五錢 郵稅六錢

世に和歌の作法を教ふる書多しと雖も、其簡便にして興味を備へたる、大和田建樹君の應用歌學なりとす。如何に初心なる少年子女と雖も、讀んで解し易く、試みて實益あるは、大和田君の應用歌學なりとす。卷中載する所數十條、作歌訣あり、思想言語の撰擇法あり、題詠心得あり、文法入門あり、而して最後に實修の法を擧げ、大和田君が門生の詠歌に添削批評を加へたる實例を示し、更に古人大家の作品に就きて、其妙處を指摘せられたり。苟くも歌學に志す方々は、讀んで歌の歌たる所以を辨明し給へ。

有賀長伯先生著

和歌八重垣

全七冊和裝 正價四拾五錢 郵稅四錢

伯爵東久世通禧君題辭 井口隆太郎君著

歌學捷徑

全壹冊洋裝 正價金拾五錢 郵稅六錢

歌は詠むべし、作るべからずとは、古人の確言なり。故に初學の徒を導くには、詠む事を教へて、作る事を禁めざるべからず。然るに世の歌學の書を見るに、大方詩語碎金、幼學便覽等の如きものに習ひ、歌を作する事のみを教へたるものならざるはなし。唯五言七言の句を配列して、三十一字となしたるもの、豈真歌といはんや、啻に歌にあらざるのみならず、初に作る事のみを習へるものは、後日に至りても猶其癖去らず、信偏なる句調、遂に軀をなして眞誠なる歌を詠み出づる事能はざるにいたる。著者大にこれを遺憾とし、數年の間研究して斬新奇拔ある一良法を得られたり。苟も斯學に志すもの、この書により、この法に隨ひて、學びたらむには、いかに初學の徒といへども、自ら天真爛漫の歌を詠み出づるに至らん。

佐々木弘綱翁 佐々木信綱君選

千代田歌集

全三冊洋裝 正價一冊金二十錢 郵稅一冊六錢

花に鳴く鶯、水に住む蛙、いづれか歌を詠せざらん。歌は文學の精華、美術の神髓にして、歌人一唱の詠は千古傳唱し、以て鬼神を感ぜしむべく、以て天地を動かし、本館全國の諸歌人の玉詠を彙集し、之を佐々木兩君の撰を請ひ本書を發せしに、何れも世の好評を得て、數版を重ねるに至れり。此書これ明治の歌人の詠を網羅せるもの、世の文學に志あつく、和歌に志深き人、速に此書を座右に備へられん事を。

穂積重嶺君序文 岸本宗道君校註
井上頼因君序文

古今和歌集

全壹冊洋裝 正價廿五錢 郵稅四錢

東久世通禧伯序文 佐々木信綱君校註

註校 明倫歌集

全壹冊洋裝 正價貳拾錢 郵稅六錢

伯爵東久世通禧君序文
子爵前田利啓君題詠
佐々木信綱先生著

百人一首講義

全一册洋装 三百拾餘頁 正價二十錢 郵税六錢
古今和漢の書、其數數十万部に及ぶべしといへども、普く世に行はれ普く世人に知られ、沙くむ海士柴刈る童にいたるまで、口暗んずるは此百人一首なるべし。定家卿の撰ありてより既に千年、益廣く吟賞せられ、老幼貴賤和歌といへばまづ此書をさすに至れり。故を以て從來註釋の書少なからざれど、あるは煩に過ぎあるは簡に過て未だ適當の書ある事なし。こゝに歌人の名世に高き佐々木先生此講義を公にせらる。本書の脉裁、まづ人々の傳記逸話をのせ、次に懇切なる講義、及古人の意見を擧げ、詳細もらす所なし。故に何人も是を讀まば、百首の深意を知り、作歌の葉ともなすを得べし。歌に志す人はさらなり、歌を知らざる人も又一本を机上に備へて其眞意をさとりたまへ。

御歌所勤務谷勤君序文 下野遠光君著

百人一首略解

全一册洋装 大判美本 正價拾五錢 郵税六錢
定家卿の小倉百首は我國古來和歌の萃を抜き美を集む幽婉高雅眞に絶世の傑作なりむべなり其の撰集せられし以來既に千年の久しきを經て益ます廣く吟賞せられ、苗さす九重の上より猪臥す埴生の小屋の内に至るまで貴さも賤しきも老も若きも和歌とし云へば先づ百人一首を指し牛牽く童蛭が子も口に暗んじて誦するに至れり盛んなりといふべし然れども能く百首の意味を解する者に至ては世に其人甚だ少し故に輒もすれば誤謬を傳へ千古の名吟を損すること多し此書は親切に百首に解釋を施し何人も之を讀めば百首の意味に通ずるを得て以て作歌の入門とも爲すに足るものなり